

術後に多い肺血栓塞栓症

やまなし

医療最前線

県立中央病院から

足の静脈にできた血栓が肺の血管に詰まり、呼吸困難や死に至るケースもある肺血栓塞栓症。長時間飛行機に乗った際起こることもあり「エコノミークラス症候群」として知られるが、長期入院や手術後など医療現場でも発生するという。県立中央病院は発症リスクが高い整形外科の骨折治療に対し、積極的に血栓予防に取り組んでいる。

リハビリテーション科科長の岩瀬弘明医師によると、大腿骨の骨折や、膝関節、股関節の変形などに伴う人工関節置換術、脊椎や骨盤など複数箇所を骨折した多発外



岩瀬 弘明
リハビリテーション科科長

独自の対策でリスク低減

《 78 》

傷の手術後、足の静脈に血栓ができやすい。

このほか危険因子には寝たきりの状態や肥満、心不全などがあり高齢者もその一つ。骨折治療を受ける高齢者の割合が高くなってきたことから、肺血栓塞栓症に対する予防策が必要になってきたという。

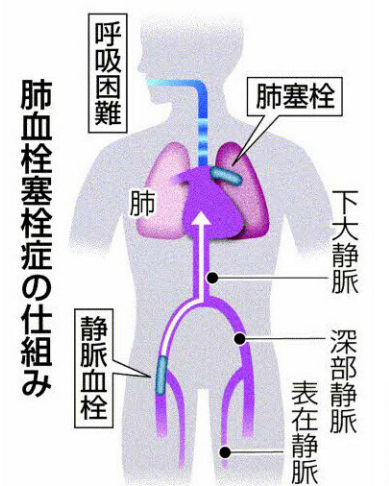
予防しなかった場合、人工股関節手術で2〜3割、人工膝関節手術で4〜6割、股関節骨折の手術でも3〜6割の頻度で術後に血栓ができ、血栓が静脈を伝って肺の血管に詰まると2〜3割が亡くなるという。

「受傷後2日以内に手術すると血栓ができにくい。すぐに手術をして術後早く動くことが最大の血栓予防策」と岩瀬医師。早期治療・早期離床に加え、同病院では2003年から、より効果的な予防法を独自に取り入れている。

手術前に患者の血液マーカーを測定し、数値が高い場合は造影剤を使ったコンピューター断層撮影(CT)で血栓がないかを確認。

あれば治療後に手術をする。術後も血液を固まりにくくする薬を病気に、足から肺に至る下大静脈にフィルターをおき、血栓が肺に詰まるのを防ぐ方法もある。

術前術後の予防策によって同病院で血栓ができる頻度は10%以下



肺血栓塞栓症の仕組み

こととまっっているという。岩瀬医師はできるだけリスクを回避して適切な治療を行い、患者さんが早く元の生活に戻れるよう後押ししたい」と話している。Ⅱ第2、4木曜日に掲載します